文部科学省21世紀COEプログラム
日本発信の国際日本学の構築

COE 21 HOSEI INTERNATIONAL JAPAN-STUDIES

The Newsletter HOSEI I.J.S.

No.2 Nov.2005.

2005年10月31日
日独シンポジウム

2005年10月12日
日中韓シンポジウム

CONTENTS

シンポジウム報告 2
公開ワークショップ報告 4
公開研究会報告 5
定例研究会報告 6
活動の足取り/今後の活動計画/新刊紹介 8

国際日本学シンポジウム「東アジア共生モデルの構築に向けて ―文化交流とナショナリズムの交錯―」

- 日　時：2005年10月12日(水) 12:00―18:00
- 場　所：ボアソナード・タワー26階 A会議室
- 主　催：法政大学国際日本学研究センター・国際日本学研究所

プログラム

1. 中日相互認識とナショナリズム
王　新生
北京大学教授

2. 戦没者儀礼とナショナリズム
崔　吉城
東亜大学教授

3. アイデンティティの重層と背反－その彼方に
山室信一
京都大学教授

4. 東アジアにおける対話の土台づくり
羅　紅光
中国社会科学院社会学研究所所長補佐・教授

5. 韓国におけるナショナル・アイデンティティの新しい展開
鄭　大均
首都大学東京教授

6. 日本におけるグローバリゼーションとナショナリズム、自己愛的ナショナリズム
坪井善明
早稲田大学教授

グローバル化に対応した国際協調が研究においても要求されている。人の交流が国の枠を超えて進んでいる以上、研究のテーマ選択においても研究法模索においても国際的な視野が当たり前になりつつある。日中両国は古来、密接に交流を重ねており、文化を共有してきた歴史的な経緯がある。両国において文化を研究するにあたっては、とくに二つの文化を俯瞰できる複眼が求められる。最近の政治・外交のギクシャクした関係でナショナリズムの高揚という傾向もうかがわれるが、研究は研究として、政治・外交上の時事問題に影響されることなく、あくまでもより実態に近づくために真摯な姿勢で取り組まれるべきであることはいうまでもない。

中国の日本研究を研究するチームは、日中両国とも文化を独自に深化させてきたことを認め合うことが基本と考えた。異文化と認識したうえで共生の研究アプローチを模索している。このコンセンサスを共有しているという前提で、これまでに「日中の文化関係を考える」主題テーマをめぐって、3回のシンポジウムを開いた。

パート1　相互認識の「ずれ」を中心に
(2004年10月4日開催)
パート2　文化摩擦(ずれ)から文化交流(相互理解)へ
(2005年3月7日開催)
以上2回は日中の研究者に限られた。
パート3　「東アジア共生モデルの構築に向けて――文化交流とナショナリズムの交錯」
(2005年10月12日開催)

3回目は韓国の研究者も加わった。1、2回目を通して相互認識の「ずれ」について成果を共有したことを踏まえて、国際協調の精神を生かして、知的対話の可能性を探ってみた。しかし、日中韓共生への客観的なアプローチモデルを確立するには程遠く、解決していかねばならない課題が山積していることは認めねばならない。

とりあえずは、主に三つの角度から相互認識の「ずれ」に迫り、その要因分析を試みている。

(1)それぞれの文化の中核として脈々と受け継がれている伝統的、基本的な価値観や考え方といった深層文化の違いを探った。これまであまり重視されてこなかった視点であろう。

(2)コミュニケーションの在り方と形式の違いが、どう日中間の摩擦や誤解の一要因として働いているのか。ミクロな視点から「人」と「人」との関係にも焦点を当て、現実にある事例を比較・分析した。

(3)急激な社会変化が進行している現代中国で新しい世代が日本文化に憧れや期待をいだいている実態を確認し、また、急激な変化が中国国民に幅広く深く不安や緊張をもたらしていることにも注目しながら、日本文化の受容および日本観の変容について考察してみた。

(事業推進担当者　王 敏)

国際日本学シンポジウム「ドイツ語圏における日本研究の現状」

- 日　時：2005年10月31日(月) 10:00—17:00
- 場　所：アルカディア市ヶ谷(私学会館) 伊吹の間
- 主　催：法政大学国際日本学研究センター・国際日本学研究所、ボン大学近現代日本研究センター
- 後　援：ドイツ連邦共和国大使館

プログラム

1. 日本研究の歴史と現状
ヨーゼフ・クライナー(Josef Kreiner)
ボン大学主任教授、日本文化研究所所長

2. ドイツの大学における日本語教育の現状と問題点
モニカ・ウンケル(Monika Unkel)
ノルトライン・ヴェストファーレン州立言語研究所日本語学科長

3. ドイツ人の見た日本史
クリスティアン・オーバーレンダー(Christian Oberlaender)
マーティン・ルター・ハレ・ウィッテンベルク大学日本学科教授

4. ドイツにおける日本思想史研究：過去の経緯と現代の課題
クリスティアン・シュタイネック(Christian Steineck)
ボン大学近現代日本研究センター研究員

5. ドイツにおける日本経済の研究
フランツ・ヴァルデンベルガー(Franz Waldenberger)
ミュンヘン大学日本センター・経済学部教授

6. ドイツにおける日本研究——歴史と現況：ドイツ語による日本法の研究
ハインリッヒ・メンクハウス(Heinrich Menkhaus)
マールブルク大学法学部教授

7. 日本文化科学と新メディア：文学と史料の電子化に関わる諸問題
ロベルト・ホレス(Robert Horres)
テュービンゲン大学総合文化科学部教授

8. ドイツにおける日本の政治の研究
アクセル・クライン(Axel Klein)
ボン大学近現代日本研究センター助教授

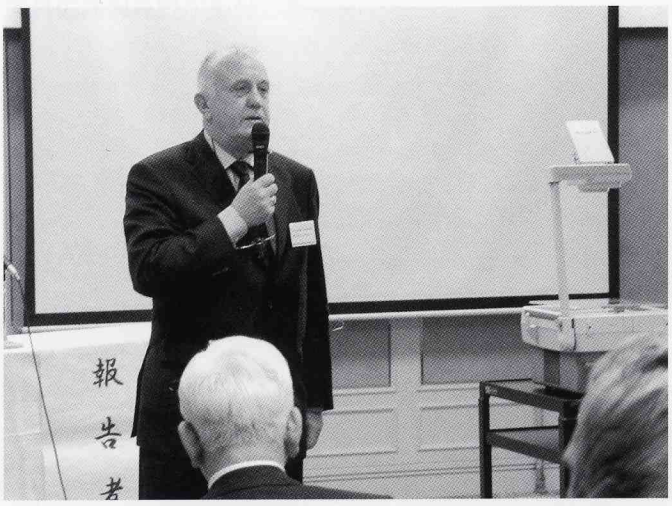
9. 日本民族学の研究
ヨーゼフ・クライナー(Josef Kreiner)
ボン大学主任教授、日本文化研究所所長

コメンテーター：
毛塚　勝利　中央大学法学部教授
伊集院　立　法政大学社会学部教授
星野　　勉　法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授

19世紀半ば、文献学として設置されたドイツのJapanologie日本学は、1960年代後半に転換期を迎え、主に英語圏の社会科学的な日本研究Japanese Studiesを取り入れ、1970年代後半には大きく変貌した。現在は、幅広く多様な日本研究が行われ、東京のドイツ—日本研究所をはじめ、ドイツ各地の幾つかの研究・教育拠点を中心に日本研究が展開されている。しかし、同時に、大学改革の嵐の中で、日本研究の研究・教育拠点が、再び縮小される危機にも直面している。

ボン大学近現代日本研究センターの教授、研究員を中心にミュンヘン、テュービンゲン、マールブルク、ハレ各大学の教授陣8名がそれぞれの専門領域から「ドイツ語圏における日本研究の現状」について発表し、さらに日本側のコメンテーター3名を交えて討論を行った。ドイツ語圏の日本研究の現状を総体的に浮き彫りにすることができたばかりではなく、日独双方の視点の判断基準の前提を明らかにする上でもきわめて有益なシンポジウムであった。

とりわけ、ドイツ語圏の日本研究が、ヨーロッパ的な概念枠組みをツールとする日本研究を超えているか、それとも超えていないか。超えているとすれば、そこに何が起きているのか、という問題にまで議論が発展し、この問題を解明するためにも日独双方の共同研究の必要性が確認されることになった。　(拠点リーダー　星野 勉)



「日本研究の土俵をどのように作るか」

山折　哲雄
（宗教学者、前国際日本文化研究センター所長）

- 日　時：2005年10月29日（土）14:00—16:30
- 場　所：ボアソナード・タワー25階 B会議室

国際日本文化研究センターの前所長、山折哲雄氏をスピーカーとして招聘して、公開ワークショップ「日本研究の土俵をどのように作るか」が、10月29日（土）14時から、ボアソナード・タワー25階B会議室において開催された。

山折氏の報告は、死者を許す日本文化と「死者に鞭打つ」（中国）、「恨（ハン）の500年」（韓国）に示される中国、韓国の文化とを対比して、日本文化の背景には日本仏教があるという文化比較から始められた。日本では、仏教が鎮めの装置、鎮魂装置として機能してきたばかりか、生者必滅という無常観がもともと伝統としてあり、それが、たとえば平安時代に350年、江戸時代に250年の長きにわたって平和が継続した理由ではないか、また、明治維新が無血革命であったことの理由ではないかとの考えを示された後、それとの対比における、現代日本の無宗教状態に言及され、その原因は明治国家の二つの宗教政策にあるのではないかという考えを述べられた。明治国家の二つの宗教政策とは、一つは廃仏毀釈であり、もう一つは祭祀儀礼と宗教の分離である。明治国家は、西欧のキリスト教のような精神的機軸の欠如を深刻に受け止め、それに相当するものを構築するために、伝統神道を「国家神道」という非宗教的な人工神道へと改造したが、これがかえって日本人の宗教心を風化させたというのが、山折氏の論点である。

さらに、山折氏は、明治維新以降の近代化にあたり福沢諭吉、内村鑑三、柳田国男のそれぞれの路線という三つの選択肢（オプション）があったという仮説を示され、実際には、そのなかでも福沢諭吉の富国強兵路線が採用されたが、とりわけ現代の観点からは、宗教的な基軸の重要性を説く内村鑑三、国家神道に対する民族神道を説く柳田国男の路線を見直すべきであり、とりわけ、心意現象に注目した柳田民俗学が復権されるべきであるとの考えを展開された。

以上、宗教学者の立場から、西洋ならびに中国、韓国との比較の視点から日本的なものに迫りつつ、現代日本の精神的な問題状況の原因を歴史的に明治国家の宗教政策に探り当て、そこから逆に問題状況を打開する道を展望するという、日本研究の一つの方向性を示唆する、きわめて意義深いご報告であった。

これに対して、日本の文化的伝統の基礎に無常観があるとすれば、それは西欧キリスト教の基軸＝原理的なものとそもそも馴染まないのではないか、日本文化における精神的基軸を考える場合、柳田国男その人のどのような考え方が参考になるか、などの質問が出され、活発に議論された。そうした議論を通じて、日本研究の土俵を作るにあたり、これまで常識とされてきたものに寄り掛るのではなく、そのような前提そのものを改めて問い直すことの必要性が確認された。　（拠点リーダー　星野 勉）

「日本語の個人感情移入の表現スタイルについて」

徐　一平
（北京日本学研究センター所長）

● 日　時：2005年9月20日（火）18:30—
● 場　所：ボアソナード・タワー25階 B会議室

2005年9月20日（火）、国際日本学研究所が主催する公開研究会において、北京日本学研究センター所長で日本語学を専門とされる徐一平先生による講演が行なわれた。「日本語の個人感情移入の表現スタイルについて」と題し、日中両言語の認知スタイルの差異に着目し、両国の文化の違い、ずれを検討するものであった。要旨は以下の通り。

認識論的に考えると、人々がことばを使うことの根源的な目的は以下の2種類に分類される。ひとつは、現実にある事柄を承認する「存在承認」であり、他方はこういうものが欲しいと希求する「存在希求」である。また、こうした発言動機の形式は、どの言語でもほぼ一致している。

しかし、ひとたび感情という側面から言語を考えてみると、各言語間における差異は大きく、特質を見出しやすい。何らかの刺激を受けた場合を想定してみるとしよう。日本語で、「痛い」という感情を「いたっ」、熱いという感情を「あつっ」と表現する場合がある。当然中国語にも痛いや熱いといった意味の言葉はあるが、この場合、中国では「哎哟（エイウ）！」という同一の擬音語で感情を表現することが一般的である。つまり、発せられた言葉を受ける側から見れば、中国語の場合は音声で状況を判断するほかないのに対して、日本語の場合には「熱い」という形容詞の語根「あつ」、「痛い」という形容詞の語根「いた」で表すことが出来る。

また、情意形容詞（例：懐かしい）を用いた形容詞一語からなる文（以下形容詞一語文）や終助詞（例：ね？でしょ？だろ？）などの使用が多用される日本語に対して、形容詞一語文は中国語では文法的に成立し得ない。こう考えてみると形容詞や終助詞の発達は、日本語に感情表現、或いは感情移入の表現をし易くする効果をもたらしていると理解できる。

徐先生は最後に前述の話の裏づけとなる具体的な例として、川端康成の『雪国』の冒頭に見られる形容詞の使われ方に着目し、中国語に翻訳する場合の困難について説明された。日中両言語において、意味の上では同一の内容を表現することも可能であるが、感情面から考えると、互換性があるとは言えないということであった。また、日本語と中国語を比べた場合、前者において話者の感情表現、感情移入がより顕著に見られるとのことであった。そして、徐先生は言語の問題を認知スタイルの差異を通して考えることは、その国に生きる国民が持つ思考形態、あるいは文化的背景を解明する上で意義があるとの結論を述べられた。

講演終了後、出席者の多くから質問と意見表明が相次ぎ、活発な討議が行なわれた。中心となった話題は言語の特徴と民族的特性の関係に関わるものであった。日本人の使う言語は、英語や中国語のような公的（論理的）な言語ではなく、個人的な感情を乗せやすい言語であるとの指摘があった他、日本語は、単語に感情が付与されることが多いという指摘などが行なわれた。徐先生の講演は、発話者の存在を視野に入れた「感情表現」スタイルについての議論であったが、目を転じて、文字に着目した場合、漢字が持つ力についても併せて議論し、理解を深める必要があるという意見も出された。

世界認識はどの国に於ても認識論的方法によって行なわれている。しかし、いったん認識されたものを言語に置き換えて表現する時、表現の場において差が生まれる。場との関わり方に着目した場合、世界の諸言語は同じものではないのであろう。徐先生が講演の中で指摘されたいくつかの論点は、私たちが日常的に無意識に行っている言語表現の特徴を意識させ、納得させる興味深いものであった。

（以上の発表要旨の作成は、当日の録音に基づいて、学術研究員の海保花野が担当した）

「〈日本学〉についての一考察」
—九鬼周造にとっての日本とベルクソンにとってのフランスを比較してみる—

安孫子　信
（法政大学文学部教授）

● 日　時：2005年9月28日（水）18:30—
● 場　所：80年館7階 会議室（丸）

九鬼周造（1888－1941）の『「いき」の構造』（1930）とベルクソン（1859－1941）の『笑い』（1900）とを比較しつつ、「日本学」のあるべき姿について考察する。以下での、この二著からの引用箇所の指示は岩波文庫版による。

『「いき」の構造』と並ぶ九鬼の代表作である『偶然性の問題』（1935）では、古今東西を自由に行き来しての議論が展開されており、表立っての「日本学」はなされていない。一方、『「いき」の構造』では、「日本」というものへのこだわりが全面に示されている。

まず、九鬼は言語と民族との関係に着目し、「もし「いき」という語がわが国語にのみ存するものであるとしたならば、「いき」は特殊の民族性をもった意味であることになる」（p.11）とする。そして、結論として、「「いき」は欧州語としては単に類似の語を有するのみで全然同価値の語は見出し得ない。したがって「いき」とは東洋文化の、否、大和民族の特殊の存在様態の顕著な自己表明の一つであると考えて差し支えない」（p.17）と主張することになる。そのような民族的に閉じた状態に鑑み、「我々は「いき」のessentiaを問う前に、まず「いき」のexistentiaを問うべきである」（p.18）とした上で、九鬼は、「媚態」、「意気」、「諦め」の内包概念、および、「上品／下品」、「派手／地味」、「意気／野暮」、「渋味／甘味」といった類似概念を提示し、さらに、「いき」のexistentiaを「会得」させるべき様々な具体例を挙げることになる。この作業はもっぱら「いき」がまさに「民族的特殊性」であることを追体験させることに向けられており、最後には「「いき」の研究は民族的解釈学としてのみ成立しえる」（p.92）と結論付けられることになる。

しかし、民族と言うことで、九鬼はもう少し緩やかな態度をとり、「いき」の価値を日本への狭い固執から出て主張することはできなかったのか。事実、九鬼の日本への固執には無理も生じているのである。例えば，西洋人が個人としては「いき」を体得・表現しうることが認められている。そして、固執から出ることの可能性と意味は、ベルクソンの『笑い』との対比で明らかになる。

『笑い』は、「滑稽である（comique）」という趣味判断、美的判断を徹底的に分析しており、「いきである」ことを究明した九鬼が手本にしたといっても差し支えない一冊である。しかし、『「いき」の構造』が「日本文化論」、日本文化についての論という意味での「日本学」になっているのに対し、『笑い』は「フランス文化論」ないし「フランス学」にはなっていない。両者の議論の分岐はどうして生じているのであろうか。

確かに、「いき」と「滑稽」を比べれば、前者が日本に固有の、つまりローカルな美的状態であるのに対し、後者はそもそも万国共通である、という主張はありえよう。しかし、実はベルクソンは「滑稽」のローカル性をこそ主張している（p.15）。ベルクソンが『笑い』で扱ったのは優れてフランス的な笑いなのである。ローカル性についてはさらに詳しく、ベルクソンは、『道徳と宗教の二源泉』（1932）の中で「閉じた社会」と「開いた社会」の区別を用いて議論している。ベルクソンにとって、「閉じた社会」は夫婦、家族から、村落、市街を経て民族、国家に至るまでの実定的共同体のことであり、「閉じた社会」にのみ「民族的特殊性」が適用される。他方、「開いた社会」はいわば人類的なものと想定されており、ローカルなものは一切持たないとされる。ベルクソンにとって、芸術や道徳（「開いた道徳」）、宗教（「動的宗教」）の価値を担うのが、「開いた社会」なのである。

結局のところ、ベルクソンにとって真に文化的なもの、芸術的なものは、「閉じた社会」を越えるものであり、まずは「個性的なもの」が担い、その「個性」の「真摯さ」の感化で形成される「開いた社会」がそれの伝播の場となっていく。他方、「フランス」であれ「日本」であれ、「閉じた社会」を冠として置くとき文化や芸術を持ち出すことはできず、そこでは単に社会の自己保存という功利的ないし生物学的目的に従属するものしか、求めてはならないのである。

ベルクソンが「滑稽」や「こわばり/しなやか」についてフランス的文脈で論じながら「フランス文化論」ないし「フランス学」を展開しなかったのは、「閉じた社会」である「フランス」は本来、文化とは接合しないからである。こうして、ベルクソンに従って極論すれば、「日本の芸術」「日本の美」といったことは無意味であり、「日本」を言うならば功利だけを問題とすべき、逆に芸術や美を問題にするならば「日本」を落とすべき、なのである。芸術や美は「日本学」の対象にはならない。九鬼は『「いき」の構造』で、生物学的なものと文化的なものとを混同する誤りを犯したということになるのである。

（以上の発表要旨の作成は、当日の録音に基づいて、学術研究員の鈴村裕輔が担当した）

「〈国際日本学〉における日本の位置」

桑山　敬己
（北海道大学大学院文学研究科教授）

- 日　時：2005年11月4日（土）18:30—21:00
- 場　所：80年館7階 会議室（丸）

北海道大学大学院教授の桑山敬己氏を招聘して、11月4日18時30分より80年館7階会議室において、「〈国際日本学〉における日本の位置」というタイトルのもとに国際日本学研究所定例研究会が開催された。

日本学は日本に関する研究であるから、本場日本での日本研究が海外の日本研究者から国際的に注目されるのは、ある意味で当然であると言える。ところが、おもに原始未開社会を研究対象とする文化人類学の領域では、日本を研究対象とする場合であっても、ネイティヴである日本人による日本研究は軽視もしくは無視される傾向にあるという。そして、この傾向はとりわけ英語圏の文化人類学研究において顕著である。それにしても、その原因はどこにあるか、国際的にも注目を浴びている気鋭の文化人類学者、桑山氏の研究発表は、このような問題提起から始まった。

桑山氏は、Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony, Trans Pacific Press, 2004（『ネイティヴの人類学：西洋の学問的覇権に対する日本の挑戦』日本語版近刊予定）という著作において、その原因を「知の世界システム」における日本の周辺性にあるとする。そして、この「知の世界システム」の「中心」にはイギリス、アメリカ、フランスが位置しており、そこで生産される知識は日本を含む「周辺」に対して覇権的な力をもっている。

これに対して、桑山氏は、自民族や自文化についてネイティヴ自身が自分の視点から自分のことばで語る「ネイティヴの人類学」を提唱する。その狙いは、第一に、既存の人類学に認められる西洋中心主義（＝サイードのいわゆるオリエンタリズム）や西洋の学問的な覇権に対してネイティヴの立場から異議申し立てをして、それを脱構築することにあり、第二に、「書く者」、「書かれる者」、「読む者」という「民族誌の三者構造」という観点から、既存の人類学的実践を徹底的に見直し、それを再構築することにある。

ところで、クリフォード、マーカスが編集した『文化を書く』（1986年）出版以降、文化人類学者は「書く」という行為に潜んでいる問題に強い関心を寄せるようになった。しかし、西洋の研究者である「書く者」は同じ西洋人である「読む者」にだけ目を向け、依然として「書かれる者」であるネイティヴには全くと言ってよいほど目を向けようとしない。こうした文化人類学における学問状況を見据えて、桑山氏は、「民族誌の三者構造」という観点から、人類学的実践の破壊的創造（脱構築と再構築）を企てるわけである。そのさい、決定的に重要なのは、ネイティヴの立場・視点にほかならない。

「ネイティヴの人類学」という観点は、文化人類学の領域を超えて、私たちの取り組んでいる「国際日本学」の構築を考える上でも、きわめて重要な観点である。それは、海外とりわけ西洋（＝欧米）の日本研究が嵌りやすい陥穽、すなわち、西洋中心主義（＝オリエンタリズム）と、外来の文化人類学と対抗する姿勢を崩さなかった柳田国男の一国民俗学に認められるような、日本での日本研究が陥りやすい罠、すなわち、自文化中心主義（＝エスノセントリズム）との脱構築に向けての実践にとって、ならびに「国際日本学」の構築に向けての実践にとって、貴重な示唆を与えてくれる。そのさい、研究主体であると同時に研究対象でもある日本人研究者が「国際日本学」という枠組みの中でどういう位置を占めるのか、研究主体であると同時に研究対象でもあるということが「国際日本学」を構築するに当たってどういう役割を果たしうるか、日本を含む「周辺」に対して覇権的力をもっている「知の世界システム」のなかで欧米の研究者とどう対等なパートナー・シップを築き上げていくかなど、国際日本学の構築の問題とも絡めて活発な議論がなされた。

桑山氏のきわめて啓発的で示唆に富む報告と問題提起は、12月1日から12月3日にかけてフランスのパリ日本文化会館で開催予定の国際シンポジウム「日本学とは何か——日本から見た〈日本研究〉、ヨーロッパから見た〈日本研究〉」のテーマに繋がるものであり、シンポジウムでの発表予定者にとっては重い課題を突き付けるものでもあった。

（拠点リーダー　星野 勉）

活動の足取り

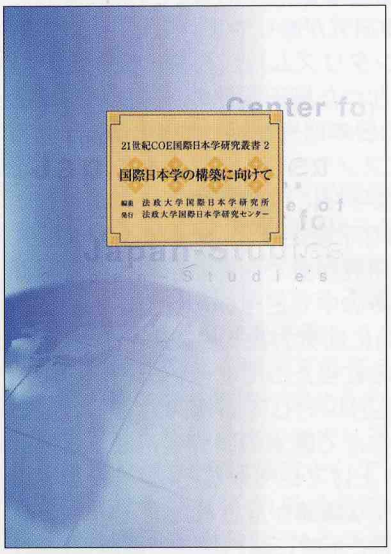
1. **公開研究会**　『日本語の個人感情移入の表現スタイルについて』　徐 一平氏　2005. 9. 20　ボアソナード・タワー25F B会議室
2. **定例研究会**　『〈日本学〉についての一考察 —九鬼周造にとっての日本とベルクソンにとってのフランスを比較してみる—』
   安孫子 信氏　2005. 9. 28　80年館7F 会議室(丸)
3. **日中韓シンポジウム**　『東アジア共生モデルの構築に向けて —文化交流とナショナリズムの交錯—』
   2005.10.12　ボアソナード・タワー26F A会議室
4. **ワークショップ**　『日本研究の土俵をどのように作るか』　山折 哲雄氏　2005.10.29　ボアソナード・タワー25F B会議室
5. **日独シンポジウム(ドイツ大使館後援)**　『ドイツ語圏における日本研究の現状』　2005.10.31　アルカディア市ヶ谷 伊吹の間
6. **定例研究会**『〈国際日本学〉における日本の位置』　桑山 敬己氏　2005.11.4　80年館7F 会議室(丸)

今後の活動計画

1. **日仏シンポジウム**　2005.12.1～12.3　フランス パリ　日本文化会館
2. **成果報告会**　2005. 12. 17　58年館 会議室
3. **定例研究会**　勝又 浩氏　2006.2.24　ボアソナード・タワー19F D会議室

新刊紹介

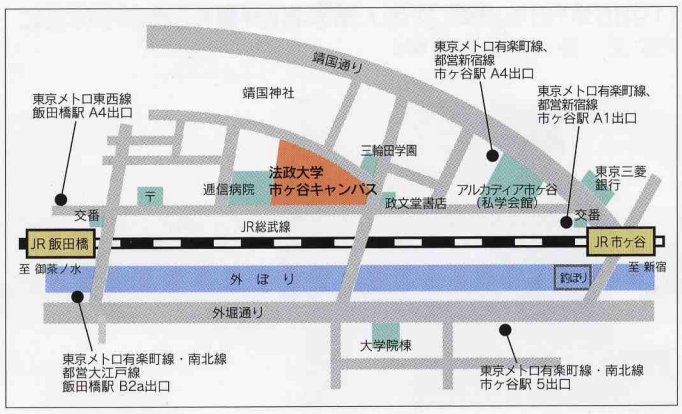
21世紀COE国際日本学研究叢書2
「国際日本学の構築に向けて」



この叢書には、以下の内容を収録している。

刊行にあたって	星野　勉
知の国際化に向けて	樺山 紘一
異文化理解の可能性をめぐって —日本文化研究の方法論をめぐる考察—	星野　勉
中国における日本研究の研究を中心に —国際日本学研究方法論試論—	王　敏
新しい方法の構築のために	立石　伯(堀江 拓充)
趣味の国民性をどう扱うか —九鬼周造の日本、ベルクソンのフランス—	安孫子 信
「国際日本学」の構築に関する二、三の考察と意見	勝又　浩

お詫びと訂正

前号に掲載された氏名に一部誤りがありました。ここに慎んでお詫び申し上げるとともに訂正させていただきます。
「2005年度 国際日本学 研究者一覧」最下行　(誤)鈴村祐輔 → (正)鈴村裕輔

法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター
〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学市ヶ谷キャンパス 第一校舎4階
TEL. 03-3264-9682　FAX. 03-3264-9884
E-mail:nihon@hosei.ac.jp
URL:http://www.hosei.ac.jp/21coe/nihon/